

## 書評

呉座勇一著

### 『一揆の原理』

(洋泉社、二〇一二年、

ちくま学芸文庫、二〇一五年)

### 『戦争の日本中世史』

(新潮選書、二〇一四年)

### 『応仁の乱』

(中公新書、二〇一六年)

亀田 俊和

## 一 概要

近年、日本中世史研究は大きな変化を見せつつある。従来の定説が大胆に批判され、盲点を突くような斬新な見解が次々と生み出されている。

そうした学界の最先端を切り開いている若手研究者の一人が、呉座勇一氏である(以下、「著者」と称す)。二〇一二年に著者が初めて世に出した一般書である『一揆の原理―日本中世の一揆から現代のSNSまで―』は、大きな反響を呼んだ。続いて二〇一三年に刊行された『戦争の日本中世史―「下剋上」は本当にあったのか―』も反響が大きく、二〇一四年に角川財団学芸賞を受賞した。そして二〇一六年刊行の『応仁の乱―戦国時代を生んだ大乱―』は刊行直後から増刷を重ね、驚異的な売れ行きを見せている。

本来、学術雑誌で書評や研究動向に取りあげられる著書は、査読を経て学術雑誌に掲載された学術論文を中心としてまとめられた学術専門書に限られるのが普通である。しかし著者による一般書は、右で述べたように一般向けの読者に対して売れ行きが良好というだけではなく、学問的にも重要な指摘や成果が多く、学界でも大いに議論の対象とすべきであると考ええる。そこで少々異例ではあるが、右に掲げた著者の一般書三冊を研究動向として検討を試みる次第である。

『一揆の原理』は、三部九章で構成されている。一部は、一揆に関する基本事項の確認である。一章では、江戸時代の百姓一揆に関する最新の研究が紹介される。二章では、

莊家の一揆、土一揆、国人一揆など、中世の多種多様な一揆の概要が示される。一揆と言えば江戸時代の百姓一揆がイメージされるのが普通であるが、それよりも正当な権利行使として認知され、武士・僧侶など身分を問わずに結成されて武力行使も普通であった中世の一揆こそを検討する必要性が主張される。

二部は、一揆の際に中世人が行った儀式や作成した文書など、さまざまな行動が具体的に検討される。三章では、一揆と同義語として用いられた「一味同心」の概念が取り上げられる。意見を完全に同じくする人間が平等に結束し、運命を共有すること、それが一味同心である。原始仏教の教理である「一味和合」と似ているが、実は無関係の思想で、中世日本人の宗教観や世界観を反映したものである。

四章は、一揆の多種多様な情報伝達手段が紹介される。中世においては、一揆の首謀者たちは街路に高札を掲げ、一揆への参加を呼びかけた。また代表的な室町文化である連歌も一揆との親近性があり、連歌講の姿をとって出現した国人一揆の存在など、注目すべき現象が指摘される。

五章は、一揆を結成する際に行われる儀式である「一味神水」に関する先行研究批判である。一味神水とは、一揆の参加者が神前で起請文を焼き、灰を入れた水を回し飲みして結束を誓う儀式である。従来の研究は、一味神水の宗

教的・呪術的・神秘的側面を過大評価してきた。しかし集団の同調圧力に屈し、本心を隠して一味神水に参加した人間の存在などを指摘し、迷信深い中世人といえども神罰を心底から信じていたわけではないことを論証する。

六章では、一揆結成時に作成される起請文（「一揆契状」の意味が考察される。一揆契状は、著者の当初の研究テーマでもある（呉座『日本中世の領主一揆』思文閣出版、二〇一四年）。豊富な事例の検討から浮かびあがるのは、たくみに情報を操り、多様な手段や論理を駆使して上級権力と交渉する、訴訟戦術としての一揆の姿である。中世の一揆は、神への誓約によって強固に結びつけられた、現代人とは異質の集団でもなければ、本質的に反権力の革命でもなく、体制を肯定した上で待遇改善を求める存在だったのである。

三部は、「一揆の実像」と題されている。七章の前半は先行研究批判である。国人一揆を、農民闘争を抑圧するために領主階級が結成した「暴力装置」であるとすると、逆に地域社会の秩序を維持する存在として高く評価する学説も、いずれも否定される。しかし本章の特色は、二人だけで結成される国人一揆や、参加者が集合せずに一味神水も行わない「秘密同盟」としての国人一揆の存在を指摘したことであろう。「相手にふりかかった問題を自分の問題

として考え、親身になって、その解決に協力する」（一八三頁）、こうした「人のつながり」が一揆の本質であると著者は主張する。

八章は、「契約」の側面から一揆の実像にせまる、著者の新しいアプローチが示される。実の兄弟ではない二人が擬制的な「兄弟」となることを定めたものを「兄弟契約」といい、鎌倉後期に成立したと見られる。一対一の一揆契約は、この兄弟契約に非常に近い。一揆の結合原理を神仏の前での「無縁」空間の創出であるとする学説を批判し、旧来の「縁」をいったん切断了上で新たな「縁」を生み出す行為と把握すべきと主張する。一揆契約などの起請契約は呪術的な「神への誓約」ではなく、現代の契約に近い法的な「人と人との契約」である。学術的に検討する場合、これが本書の結論であろう。なお終章では、一揆の精神を現代に活かすべきであると提言されている。

『戦争の日本中世史』は、全七章で構成されている。一章は、蒙古襲来を論じた章である。文永の役におけるモンゴル軍撤退の要因が、「神風」や「威力偵察」であるとする従来の定説を批判し、鎌倉幕府軍の実力によるとする見解も斬新である。しかし特筆すべきは、鎌倉時代が実は戦乱のない平和な時代であり、幕府首脳も鎌倉武士も「平和ボケ」していたとする主張であろう。蒙古襲来も九州地方

に限定された局地戦であり、日本全国に大きな影響を与えた戦乱は、やはり南北朝時代まで下るのである。

二章は、「悪党」に関する議論である。悪党の研究史整理が簡潔に行われ、種々の学説が紹介される。悪党とは、鎌倉後期の訴訟において訴人が論人を糾弾する際に用いられた訴訟用語である。荘園の一円化が進行する過程において、在地で紛争が激増したことに伴って頻出した。また仏神の敵を悪党と見なす宗教用語としての側面もあるが、いずれにしても敵に対するレッテル貼りであり、悪党なる特定の階級は存在しなかったとするのが現在の定説である。著者は、鎌倉後期〜南北朝期を「悪党の時代」と位置づける先行研究に疑義を呈し、代わって当該期を象徴する存在として、「有徳人」と呼ばれた富裕層を提示する。併せて、鎌倉幕府滅亡に関する従来の学説も批判し、直接的契機として楠木正成の奮戦を高く評価する。

本書の主題とも言える南北朝内乱史に関する記述が始まるのは、三章からである。後醍醐天皇が当初から幕府否定・君主独裁の思想を持っていたとする定説が批判される。にもかかわらず、足利尊氏が示した破格の講和条件を拒んで南朝を開いて徹底抗戦したのは、強大な鎌倉幕府を奇跡的に滅ぼすことができた成功体験が後醍醐に過剰な自信を抱かせたからであると論じる。次いで観応の擾乱に至るまで

の政治史・軍事史の概要が、諸学説（尊氏躁鬱病説、尊氏・直義兄弟の二頭政治論、「守護・大将併置制度」論に基づく「足利一門優遇政策」説）への批判を伴いながら示される。そして兵糧の現地調達、南北朝期特有の現象である兵糧料所の設定や半済令について論じられる。また農民で編成される野伏部隊を過大評価してきた先行研究を批判し、補助的な役割にとどまったとする。戦術面に関しても、歩兵による弓射が行われた後に騎兵による白兵戦に移行する形態が主流であったことを指摘し、遠征や戦鬪が大規模・長期化したことに伴い、兵糧の争奪戦が最優先された点にこの時代の戦争の画期を見いだすべきであると主張する。

四章は、合戦に動員される戦鬪員である武士に焦点が当てられる。南北朝期の武士たちの間には、厭戦気分が蔓延していた。大規模な戦争への参加は戦死以外にもさまざまになりリスクがあり、武士たちは出陣前に遺言状を作成したり、早期に養子を指定したり、兄弟惣領制を採用したりするなどの対策を採った。さらに内乱の長期化は戦争の大義名分さえも曖昧にし、目的を失った武士たちの厭戦気分は一層強まった。同時に国人一揆の結成が本格化し、遠征を忌避して本拠地周辺の支配固めに奔走する武士も出現する。

五章では、北畠親房・今川了俊といった地方で軍事指揮官を務めた武将たちの人心掌握術が紹介される。武士への

恩賞充行・所領安堵に消極的であったとされる親房であるが、実例を具体的に検討すると必ずしもそうではない。恩賞としての官職任命も、幕府よりもはるかに積極的であった。九州探題今川了俊に対しては、親房とは逆に過大評価されていると論じ、探題解任の理由も南九州の統治に失敗したからであるとする。地方の指揮官は充行や安堵の約束手形をばらまいたり、大義名分を説いたり、訴訟の便宜をはかったり、戦況の優位を誇大に宣伝するなど、さまざま手段を駆使した。

六章では、擾乱以降の戦争について論じられる。二代將軍足利義詮期には、大規模遠征が失敗する事例が増える。義詮は大内氏・山名氏・上杉氏といった南朝勢力を話し合いで帰順させる融和政策に転換する。そして三代將軍足利義満治世の初期、応安元（一三六八）年に管領細川頼之が主導して制定した応安大法を「大規模戦鬪終結宣言」と評価する。同時に武士所領の一円化が進行し、安芸・備後の在地領主も嫡子単独相続へと移行し、戦鬪態勢の解除がみられる。守護を中心に在京奉公する武士も増加した。義満は有力大守護に大打撃を与え、南北朝合一を果たして遂に内乱を終息させる。国人一揆も、戦争互助機関から平和的な訴訟互助機関へ変化する。

終章は、応仁の乱に至る室町時代の通史である。「室町

の平和」は妥協の産物でもあった。義満は遠国については基本的に不干渉政策を採用し、四代義持も継承した。將軍と諸大名は大枠では自己抑制に努め、穩健で保守的な政治を維持した。

ところが六代將軍義教は、建前にすぎなかった將軍の威信を現実にしようとした。義教は比叡山延曆寺を炎上させ、大和国の紛争に軍事介入し、永享の乱で鎌倉府を一時滅亡させた。しかし義教の苛烈な独裁政治は大名の反発を買い、義教は播磨守護赤松満祐に暗殺された（嘉吉の変）。

満祐の反乱を鎮圧したものの、幼少の將軍が続いたこともあり、諸大名の権力闘争が勃発した。管領の短期交代も続き、政局の混乱は一層激化した。八代將軍義政は山名氏の脅威を軽視したことにより、遂に応仁・文明の大乱を招いてしまった。応仁の乱によって、守護在京制など義満が築き上げた「戦後レジーム」は根底から崩壊し、下剋上の風潮も恒常化していった。最後に、平和を維持するために現実主義に徹する必要性が訴えられ、本書は閉じられる。

『応仁の乱』は、八章構成である。京都が主戦場だった応仁の乱とは一見無関係な大和国の騒乱を基軸に、応仁の乱を叙述した著書である。また大和に隣接する河内守護であるため、大和と関係が深かった畠山氏の動向にも焦点を当てており、そうした構成を採った時点ですでに斬新であ

る。

一章は応仁の乱を理解する前提として、事実上の大和守護として君臨した興福寺の体制や室町中期に至るまでの歴史が簡単に紹介される。鎌倉期には一乗院と大乘院の両門跡が、興福寺の支配をめぐって争った。両門跡の支配を軍事的・経済的に支えたのが、実態としては武士である「衆徒」と、春日社神人で俗体の「国民」である。南北朝期においても一乗院と大乘院は激しい抗争を続け、その結果一乗院・大乘院が保有する莊園を衆徒・国民が実質的に支配するに至った。

室町期の大和の歴史は、元北朝方で親幕府的な一乗院方衆徒の筒井氏と、元南朝方で反幕府的な大乘院方衆徒越智氏の対立を軸に展開した。応永年間には国中（奈良盆地）で大規模な紛争が勃発し、後南朝勢力も蠢動するなど、大和の情勢は不安定であった。六代將軍足利義教は従来の幕府の方針を転換し、守護軍を派遣して大和の紛争に直接武力介入し、筒井氏を支援して越智氏らを弾圧した。

二章も、引き続き応仁の乱に至る前史の叙述である。義教によって失脚していた大乘院経覚は、嘉吉の変後、越智氏の軍事力を利用して大乘院門主に復帰した。以降大和では経覚と筒井氏出身の成身院光宣の抗争が続くが、筒井氏の覇権が確立し、大乘院尋尊―光宣を軸とする興福寺の新

体制が成立する。

一方畠山氏は、持国の実子義就と弟持富の遺児弥三郎が対立する。八代將軍足利義政の無定見もあり、この抗争は一層混乱する。弥三郎は大和で光宣と連合して義就と戦うが、敗北する。だが弥三郎死後も弟政長が光宣に擁立されて、義就との一進一退の紛争が続く。

この時期の幕府は、義政の実子義尚を支持する伊勢氏、弟義視を支持する山名氏、中間派の細川氏の三者が鼎立する構造であった。文正の政変で伊勢氏が失脚すると、山名宗全と細川勝元の対立が顕在化する。勝元に対抗するため、宗全は河内・大和で軍事的優位にあった畠山義就と提携し、畠山政長は勝元と同盟した。こうして、応仁の乱の対立構造が形成された。

三章から、本題の応仁の乱が始まる。文正二（一四六七）年正月、上御霊社に布陣する畠山政長軍を畠山義就軍が攻撃したことによって、応仁の乱は勃発した。義就軍が勝利して山名宗全の政権が発足したが、同年五月（三月に応仁と改元）、細川勝元派の軍勢が全国各地で反撃を開始した。五月二六日には、京都で細川軍（東軍）と山名軍（西軍）が全面衝突した。東軍は將軍義政を味方につけて兵力でも大義名分でも優位に立ったが、西軍の大内政弘が大軍を率いて上洛し、戦線は膠着状態に陥った。西軍は東軍から寝

返った足利義視を推戴し（西幕府）、幕府は事実上分裂した。井楼・御構の出現といった戦術の変化も内乱を長期化させ、骨皮道賢に代表される足軽の活躍も見られた。同時に内乱は、京都近郊の補給路の争奪戦へと移行していった。

四章は、応仁の乱期の興福寺に関する記述である。この困難な時期、大乘院経覚が七五歳の高齢で四度目の興福寺別当に就任し、興福寺の経営再建を図る。続いて著者は、先行研究の尋尊に対する評価が階級闘争史観にとらわれて低かったことを批判し、彼の冷静沉着で慎重な方針や、興福寺の権威によって大和が戦場とならなかったことを再評価する。その他、大乘院の後継者政覚の教育方針をめぐって尋尊と経覚が対立したことや、尋尊の父一条兼良が戦乱を避けて奈良に疎開して連歌・薪猿楽などの文化交流が行われたり、古市で豪華絢爛な「林間」（風呂）が催されたりしたといった興味深い指摘がなされる。

五章では、乱の当初に東軍の主要武将として活躍した成身院光宣が、文明元（一四六九）年一月に八〇歳で死去したため、大和の東軍の勢力が衰えたことが述べられる。一方、西軍に属していた朝倉孝景が、文明三（一四七一）年に將軍義政の調略によって東軍に寝返ったことにより、東軍の優位が確立した。これに対抗し、西幕府は南朝の後胤を推戴したが、これは「北朝の軍隊」としての室町幕府

の終焉を意味した。

六章は、応仁の乱の終息過程が述べられる。文明四（一四七二）年から、講和の道が模索され始めた。しかし西軍では畠山義就・大内政弘、東軍では赤松政則が主戦派であったため、交渉は進展しなかった。文明六（一四七四）年四月に山名政豊と細川政元が講和したが、他の諸將はこれに応じなかった。こうした状況下、講和交渉を主導したのは足利義政正室の日野富子である。東軍優位の戦況が一層強まる中、窮した畠山義就は文明九（一四七七）年九月に京都から退去し、本拠地河内に下った。同年一月には、大内政弘も東幕府に降伏する。こうして、応仁の乱は形式的には終息した。

しかし河内国では両畠山氏の交戦が続き、大和衆も両軍に参加した。義就は、政長の軍勢を各地で撃破した。優れた武將で独立心旺盛な義就を、著者は戦国大名と評価する。一瞬で河内を平定した義就は、大和に侵入した。

七章は、応仁の乱後の室町幕府に関する記述である。山城地方の国人たちは一揆を結成して両畠山軍を退去させ、以降国人による自治が行われた（山城国一揆）。また九代將軍足利義尚は、近江守護六角高頼を討伐するために近江国に遠征したが、夭折した。一〇代將軍足利義材も近江に遠征し、次いで畠山義就の遺児基家討伐のため河内国

に侵攻したが、細川政元らが京都でクーデターを起こし、足利義退を將軍に擁立した（明応の政変）。義材は越中国に亡命し、幕府滅亡に至るまで「二人の將軍」の並立・抗争が常態化した。

終章では、応仁の乱の遺産が論じられる。守護在京制が解体し、自身の力量によって「国」を統治する戦国大名の時代が始まる。京都の文化が地方に伝播し、戦国大名は徳政令などを利用して郷村の武力を取り込む。畠山義就派・政長派に分裂して敵対していた大和国人たちは、細川政元に対抗するために九〇年ぶりに一致団結する。彼らは興福寺の権威を利用する形で大和支配を進めた。こうした保守性を否定的に見る学界の潮流を著者は批判し、戦国期の大和に相対的な平和をもたらした点を評価する。

## 二 成果と特色

以上、著者の著作三冊の概要を示した。成果あるいは特色として第一に挙げることができるのが、随所で展開される史料批判である。一例を挙げれば、『戦争の日本中世史』第二章において、悪党の具体的様相を窺える史料として従来必ず引用されてきた『峯相記』を信用性に欠けると評価する。古代史や戦国期研究においては史実の解明に際して史

料の信頼性から考察することは基本であるが、中世史研究ではそうした作業は必ずしも十分ではなかったきらいがある。今後、中世史研究においても史料批判は必須の作業となっていくであろうし、またそうあるべきだと考える。

第二に、研究史整理と批判が非常に巧みであることである。『一揆の原理』において著者は、マルクス主義歴史学に基づいて一揆を反体制的な階級闘争・革命と見なしてきた従来の一揆研究を批判する。だが一方で、マルクス主義的な唯物史観へのアンチ・テーゼとして起こった一九八〇年代以降の社会史研究に対しても、研究史上の功績を認めながらも批判的である。一般書である性質を差し引くにせよ、膨大かつ複雑な研究史をここまで簡潔・明快に整理し、問題点を指摘できる研究者は滅多にいないのではないだろうか。その意味で、一連の著作は初学者向けの入門書としても価値が高いと考える。

著者の階級闘争史観批判は、『戦争の日本中世史』において一層顕在化し、随所に現れる。『応仁の乱』では大胆な先行研究批判は目立たなくなり、主観を排した豊富な史実の指摘に専念するが、それでも四章で論じられた尋尊の再評価に見られるように、著者の問題意識は首尾一貫している。

周知のとおり、現代において階級闘争史観は古典的な学

説となっており、定説的地位から陥落した。社会史も、一時の流行が過ぎ去って久しい観がある。そうした古い説を今さら批判することに対しては、異論があるかもしれない。しかし、古い学説の感覚が研究者に無意識に残って再生産される弊害は、著者も指摘するところである。改めて、古典学説の問題点をきちんと整理して指摘する作業も大切であると考える。

加えて通常、そのような「理論」を排した歴史は、単なる史実の羅列に終始した平板な記述に陥りがちである。しかし著者の著作でそうならないのは、右で述べた研究史の正確な理解と、綿密な史料批判に基づく堅実な実証が根底に存在するからであろう。改めて、基本に基づいた研究姿勢の重要性を痛感する。

そうした著者の姿勢から浮かび上がる中世日本人の姿は、一言で言えば大多数の現代日本人とほとんど異なるところがない。神仏をさほど信じない割には、受験・就職など人生の一大事に際しては必ず神社に参拝・祈願し、おみくじの結果に一喜一憂する。権力者を批判するが、体制の根本的な変革までは望まない。むしろこのような現代日本人よりも、一味神水の儀式などを駆使し、宣伝や脅迫に活用して権力者から有利な条件を勝ち取る分、中世日本人は「進歩的」であったと評価できるかもしれない。全体的に



まとめれば、これが「呉座史学」の一大特徴であるように見受けられる。しかし、であるからこそ、日本中世史を学んで研究する重要性が一層際立つとも言えるのではないだろうか。

第三に、評者の関心に即して言えば、『戦争の日本中世史』四章の記述が興味深い。南北朝期において、内乱を武士たちが成り上がりの好機として捉えて喜び勇んで戦場に向かったとする従来の内乱史研究を、武士を変革の主体と見なす階級闘争史観の現れであると著者は批判する。概要でも紹介したように現実の戦場には厭戦気分が蔓延し、大将の動員命令に従わなかったり戦場から逃走したりする武士が後を絶たなかった。そうしたリアルな状況を、著者は高幡不動胎内文書を基に丁寧に復原する。

評者は恩賞充行制度の研究を重要であると考え、その手がかりとして室町幕府の執事（管領）施行システムの研究を進めてきた（拙著『室町幕府管領施行システムの研究』思文閣出版、二〇一三年）。これはもちろん、武士たちが自己の所領の拡大を願って戦争に参加したとの前提に基づくのであるが、著者の批判はそうした評者の問題意識にも向けられているように感じる。

確かに、すべての武士が所領拡大を目指していなかったのはそのとおりである。大半の武士は、現有所領の規模を

維持するだけで精一杯だったと考えられる。それは現代においても、すべての人間が立身出世を目指して生きているわけではないことと同じである。

ただし、それでも恩賞充行が当時の幕府にとって重要な政策課題であったことは変わらなないと考える。例えば観応の擾乱直後には、將軍尊氏―義詮父子による恩賞充行袖判下文が大量に発給されており、擾乱の原因と対策が恩賞充行政策の遂行にあったことを暗示していることを、かつて評者は指摘したことがある。また足利一門や鎌倉以来の有力な地頭御家人といった守護・大将クラスの武士と、零細な所領を経営するに過ぎない弱小国人クラスとは、目指す目的や幕府首脳に要求される戦果が異なっていたことも自ずと明らかであろう。七〇年に及ぶ長期的内乱になることが予想されていなかった元弘・建武期と、内乱の長期化によって疲弊して厭戦気分が一層増大した義詮期以降といった、時期的な差違にも留意する必要があるだろう。今後、著者の指摘を念頭に置きながら、評者も改めて恩賞充行について考えていきたいと思っている。

最後に、学術的な研究動向にはそぐわないかもしれないが、評者が特に感銘を受けた著者の文章を二箇所ほど紹介したい。それは、「百姓は「お客様」感覚で、幕府や藩のサービスの悪さにクレームをつけているだけなのだ」（『一揆の

原理』二一六頁）と「畠山義就の魅力は、軍事的才幹もさることながら、守護家に生まれた御曹司でありながら、権威を物ともせず、実力主義を貫く点にある」（『応仁の乱』二〇六〜二〇七頁）である。現代においても、政府のサービスの悪さにお客様感覚でクレームをつけ、そのくせ権威にからきし弱い人間が散見するので、そういう人間に墮してしまわないように心がけようと思う。優れた歴史書は、倫理面・道徳面でも我々に多くのことを教えてくれるのである。

（京都大学文学部非常勤講師）